いらつめ第卅三號目次（明治二十二年十一月卅日）

●小　說……心づくし第二回下……毛布野女史
●家　政……裁縫獨學び（初等第四）……木下貞子
半纏を裁つ圖
○裁縫獨學び（高等第四）……木下貞子
小供綿入れ羽織り縫ひ方＝大巾縮緬で並の女服を裁つ法＝小供袴裁縫法
○衞生料理法（其五）……岩間芳松
蛋の効及び料理法＝鳥肉料理心得
●文藝美術……細川幽齋和歌の主義漫評（承前）
○冬の山路（唱歌）……いらつ姫
○白薔薇（唱歌）……靑山の隠女
○懸賞文藝材料俳句和歌唱歌
題＝磯の紋に千鳥よみさみ
○東西美術相互の影響（承前）
●雜　纂……手と爪とを美麗にする法一切の心得＝色の取り合はせ方＝女子用文宛獨學び（承前）＝音樂大家もざアと傳＝日本文學者の傳記米國雜誌に上ろ＝大日本文學史編纂＝墾庭篁村氏の際道＝雙頭の男子＝僞造橙花水及び眞正橙花油＝其他
●答　書……胡瓜靑漬法
●小　說……松の下露第三回……美妙齋主人
●通信問答……髮の早く伸びる法＝下駄及び靴の脚氣との關係＝殿の語義＝毛生藥＝婦人傳洋書＝ヒヽ霜燒け藥＝仰天子花村太華諸氏の本名＝流行の肩掛け＝疑問
●餘　興……第卅號題解答及解答者

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府内に限り無郵税●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に（神田郵便局）と記し、受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い場に限り五厘切手で一割り増しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證として雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標として御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求に爲っても代金御支拂に及びません。

從第二十八號至第三十七號十部版權所有

新案別製本出版の社告　度々の御注文により第二十六號からいらつめ別製本を作り、永く保存に堪へるやうにしました。（一）別製本は美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）別製は容易に再版をせぬ事ゆゑ御注文は至急で無ければ賣れ切れになります（三）別製並製共記事は相同じです（四）定價は前にあります（五）第二十六號第二十七號及び第二十八號の別製本は悉皆賣れ切れになりました。

いらつめ合本の社告　西洋諸國の婦人雜誌では大抵一個か一ペンニの月三回以上發兌でそれを一ヶ月の後になり、二ヶ月分だけ合本し、表紙を付けて賣り出します。いらつめでも是に倣ひ、來る十二月が過ぐれば更に十二月分だけを合本し、美麗な表紙を付けて賣り出します。定價金十錢五厘郵税共金十二錢、紙數八十四ページ、總目錄付き。府内無郵税。但し本十一月に限り十月の第廿八號から十一月最後の三十三號に至るまで總六册を一部に合本して賣ります是は續稿になった記事が彼是ある爲めです是は定價十五錢五厘郵税共十七錢五厘です。

注意

本號には手と爪とを玉の樣に美麗にする法と色の取り合はせ方とが出て居ます。

明治二十二年十一月廿九日印刷
明治二十二年十一月三十日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野[illegible]

發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第三十三號

小説

第二回下

毛布野女史

世事にれ疎き信種なれとも、緣もなき我れに　斯くまで深切盡さる所存の程は解し難しと、考へつきてなか〳〵に、底氣味惡るく思れるゝを、顔には出さす心の内にて　深く注意をすると雖も、別に狡計のありとも見えねば　すべて商荷の取引れ　總て斯くするものなるか否々然るにもあらざるべし借て彙々噂に聞ける　彼が慈善の心より我々親子が困難をすくふて呉る心ならんか、澆季の世にはあり難き、人にはあると感じ入り、漸く心打解けたれば、覺えず酔も全身に廻り、

「いやもう大分酩酊致しました。　是にて拙者は御免を蒙ります」

尚ほも數献を勸めけるに、　信種太く酩酊の容子餘りに強なば惡かりなんと、此處に杯と納しかば信種軈て喜を述べ、いざ歸らんと立かゝるを、彌七は暫しと引き留め、金を其儘返し與へ、猶懇ろに開店の手配等をも説き示せば、信種只管禮を述べ暇を告げて立出たる、時は十二時過たれば、流石に繁華の錦町も漸く往來薄らぎて、瓦斯の光も何となく、物淋しげに見えたりけり、　今日店よりして信種を送らん爲めとてつけし男が、提灯持ッて先きに立てば

「いやなに拙者ならば送りて呉れるには及ばん。斯う年は老ても腕に覺えがあれば大丈夫だから戻つて下さい」。

「ひやァ往かねェでも宜いてかね。　それでもえら酔ッてるんだ。　矢張り送ッて往くべい」。

「はゝァ酔ても心は慥だ歸つて呉れい。　あゝ能い心持だ」。

「戻るたッて己れやァ直ぐにや宅へは歸らねェ矢ッ張り送つた積りで歸るんだが本當に宜いかね。　後から告口しては善くねェな。　弓八幡大丈夫かねはいそんなら　靜かに歸らッせい」。

「惡氣がないなァ。あゝ宜い心持だ」。

と獨り呟つゝ送り來し男を歸して、道すがら心の内に思ふやう、嗚呼浮世なるかな諺に、助ける神のありといふを、今ぞ我身に思ひ知る、今日まで糊口の爲めに、心を惱まし、明日の日を何んと暮さん當もなければ　今にも養子をせねばならぬ。　一人娘の身の上さへ、案ずる暇もあらざる程、せまりにせまりし其難儀を、不思議のことより有卦に入りて、斯く僥倖の打つゞくれ　夢ではないかと思ふ程、斯うも變れば變

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

るものか、早く歸りて娘にも安心させて喜べる、顏を見たしと急げども、何をいふにも年の上、殊には酒を過せしゆゑ、夜風に吹かれ往くまゝに、益醉も廻りしかは蹌々として一歩は高く　踉々として一歩は低く、漸くにして江戸川端にきたりて見れば、此邊には街燈もなく生憎に、月さへ雲に入りたるゆゑ、眞の闇路も酒機嫌、二十年來唇より　洩せしことなき謠をば人影なきを幸に

「あら淺ましや我ながら無明の酒の醉心」。

と奥歯を漏るゝ高調子に、何心なく行き過ぐる、後に一人の曲者が、忽然として現はれ出、聲をも掛けず出し拔けに、突き倒さんと身搆たり。　憫れむべし老衰の身の、取り分け醉中のことなれば、爭でか毒手を免れ得べき、あはやと思ふ時しもあれ、やつと掛たる一聲と、共にざんぶと水音して、川中深く沈みしものあり。　あな無慘やと思ひきや、再び謠ふ聲朗らかに

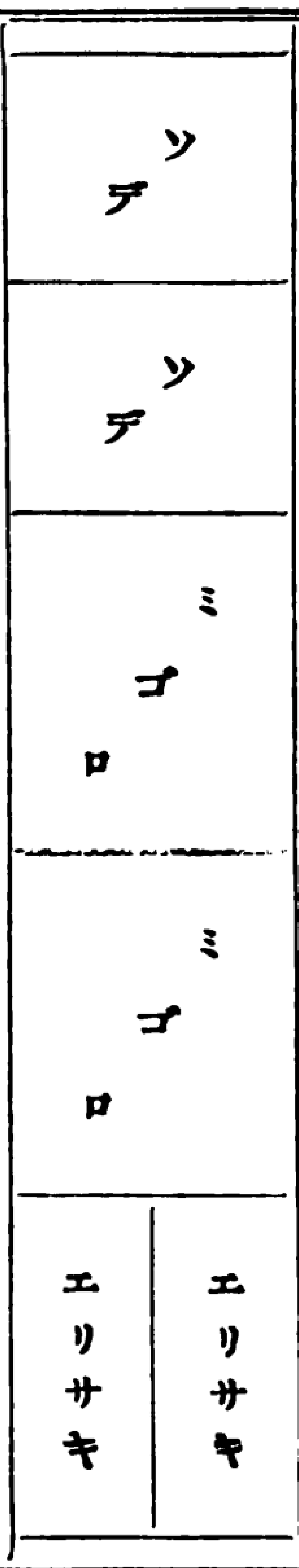
「忽ち鬼神をしたがへ給ふ威勢の程こそ恐ろしけれ」。

と實に藤原の賴茂が鬼女の退治をなしたるも、斯くやと思ひ出されて、武勇の程こそいみじけれ。

家政

裁縫獨學び(初等第四)　木下貞子

前號に記した、一丈七尺の布で半纒を裁つ、その圖は左のとほりです。

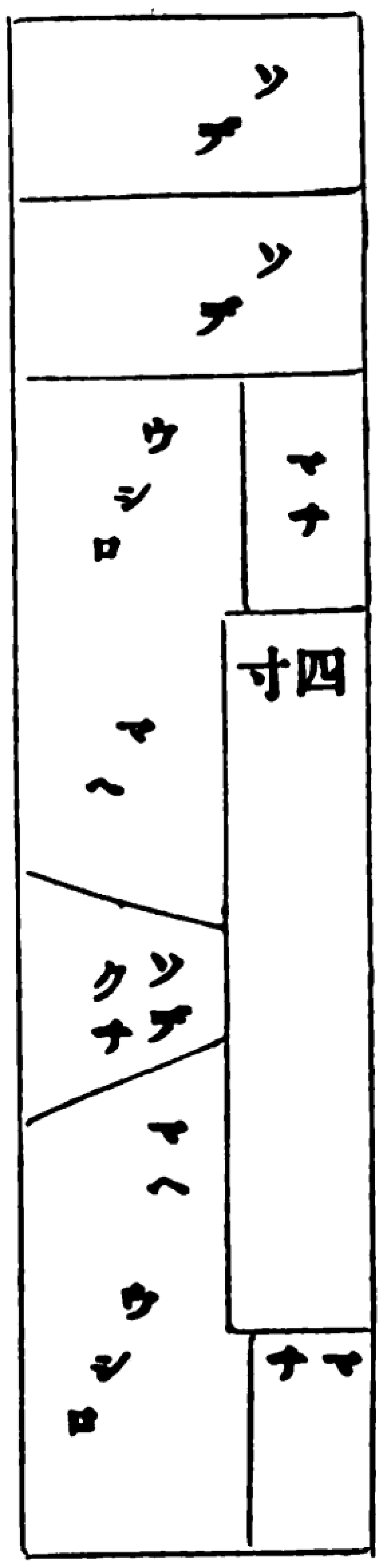


右袖丈一尺七寸、衿肩二寸三分、但し着物が二寸三分ならば衿肩は二寸四分、すべて着物に準じて一分づゝ廣くします丈二尺五寸、衿先き一尺、半えりは別切れです。

裁縫獨學び(高等第四)　木下貞子

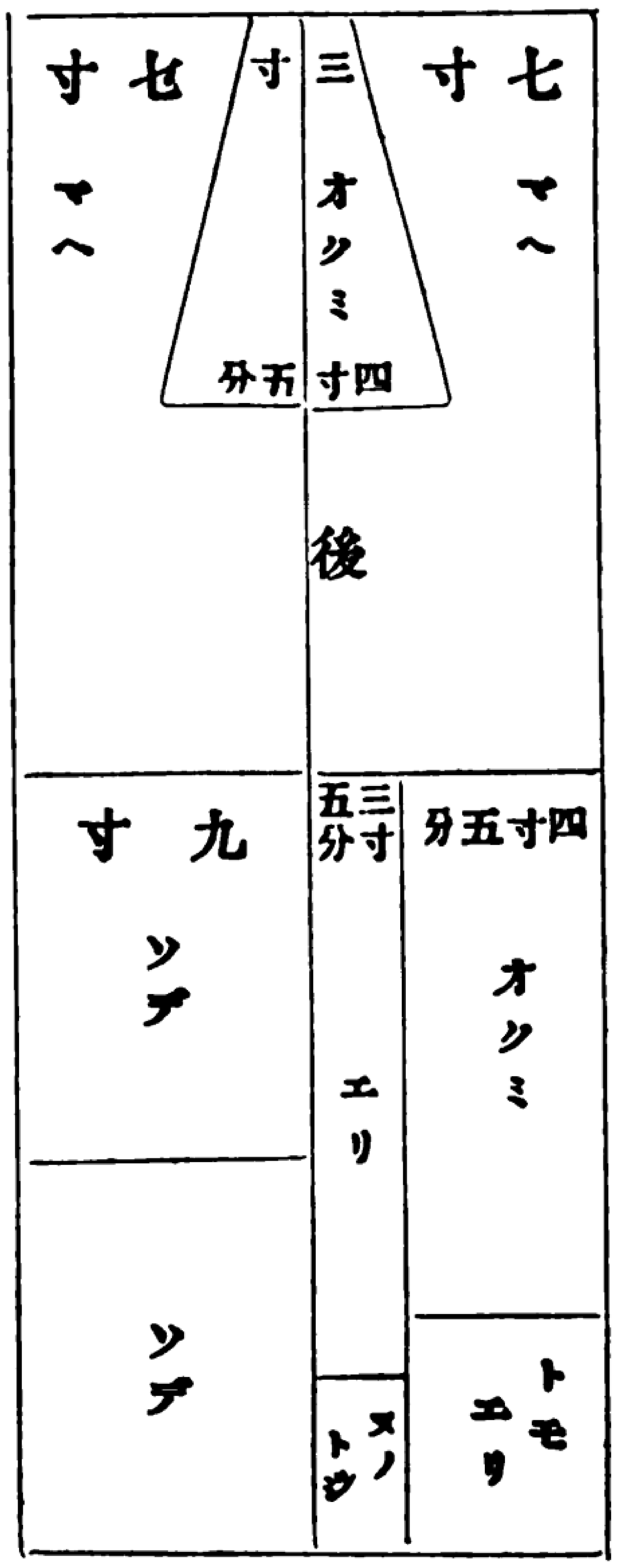
小供綿入れ羽織り縫ひ方

第一に裏袖に袖口とかけ、又袖下を縫ひ、次に表袖を縫ひシッケをかけ、次に背ぬひをし、後巾肩巾及び前巾を度り、前下りを縫ひ、左右の襠をつけ、それから裏表の袖巾とはかり、袖をつけ、假り疊みをし、綿を入れます。　くけるにも第一に袖口をくけ、前端を結びつけ、八口をくけ、衿をつけ又くけつけ、背縫ひと襠とへ布綴ぢをし、衿シッケを掛けとわるのです。



右が十一歲ぐらゐの中裁ち前衿羽織りの裁ち方です。

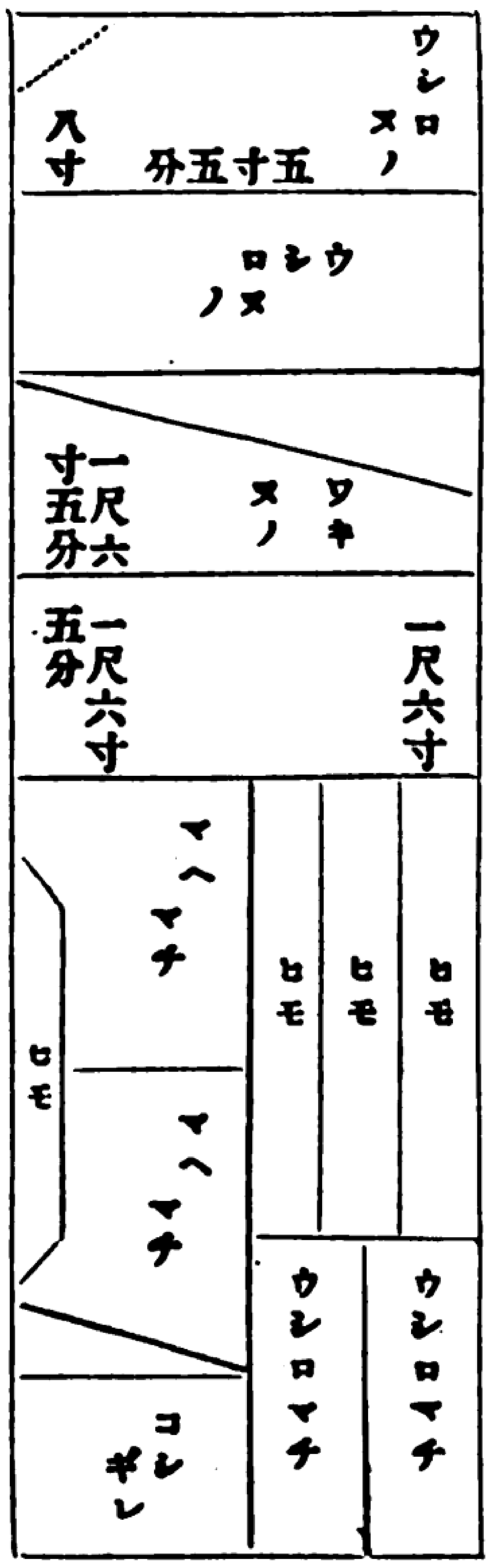
大巾縮緬で並の女服を裁つ圖



右衿肩は二寸五分、丈四尺二寸、袖丈一尺六寸、衿丈五尺衽丈四尺。

小供の袴裁縫法

七歲ぐらゐの小供袴を縫ふにはまづ腰板の下即ち投げをくけつけ、次に後襠をつけ(たゞし縫ひ目は襠の方へ返す)、次に脇布と前の襠とを繼ぎ、折り目は前襠の方へ返し、次ぎに相引きを縫ひ、折り目は脇ぬひの方へ返し、つぎに襠をぬひ、前の方へ返して伏せ縫ひにし、裾をくけ、膀をあはせ、脇の襞の巾三寸二分ぐらゐに度ッて一の襞巾四寸五分にして折りをつけ、次ぎに二の襞を三寸五分にして懐を四寸五分と定め(懐とは腰板から蹴返しの中をいふ)それに折り目をつけ次に後の襞を折り、片返しにして正しくし、次ぎに上は五分寄せ、下は一分寄せにし、中襞二の襞一の襞を折り、次ぎに笹襞を八分ぐらゐに折り、前巾五寸五分と定め、襞を皆無とぢつけ、相引きと裾との中から五分も折りかへし(相引きとは投げの下の事)、次ぎに裾のところから五分はなれて手掌をあて折りかへして押しを置き、次に紐をくけ、腰板を張り、附け菱をつけ、次ぎに紐をくけ、そして腰板へ紐をつけ、前紐をさきへつけ、後をあとへ、つぎに後布へ腰板をつけ、紐をたゝみ正しくして置くのです。



右が並巾一丈二寸で小供袴を裁つ圖で、前巾五寸五分、腰板の巾三寸五分から四寸五分まで。紐巾一寸五分、後紐一尺五寸、前紐五尺六寸、襠の高八寸、腰切五寸、相引き八寸。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

改良實用衛生料理法(其五)

元鹿鳴館料理人岩間芳松

廿三　蟹の効及び料理法　蟹は其質海老より消化よく、且海老より香味もあり、殊に人の身體を温める性を持ちますが、食用にするのは舊暦朔日の前後が宜しいです(俗に月夜蟹はわるいといふも理は有ります)。　料理法はまづ蟹を鹽湯出にし、甲を放し、水で甲を洗ひ、身を細くほごし、鍋に味淋を些し入れて氣をぬき、煮出し(鰹節の汁、前號に見えました)を少し加へ、蟹を入れ、胡椒をふり、鹽と醬油で味をつけ、皿にとりおき、鍋に温飩粉すこし入れ、蟹を煮た汁でだん／＼米の薄糊ほどに煉り伸ばし、鍋を火の外に下し、玉子の黄身を加へ、蟹を入れ、よくまぜあはせ、甲につめ、上にぱん粉をふり、蒸しやきにし、狐色程に上を薄く色付け皿に盛ッて出すのです。(西洋法では汁にも牛酪を用ゐ、又ぱん糊の上にものせます)。

魚類の西洋風料理法は日本人の口にあひません故省きます

廿四　鳥肉の効及び料理心得　種類により鳥肉料理法も色々で、味もまた野鳥水鳥は香味つよくそして消化は鶏に劣るもの丶、また滋養分は劣らぬ程色々な事が有ります。　是等の肉を料理するには殺してから二三日過ぎ、肉が充分やはらかになッたのを待ッて料理するのですが、是も四季により違ひます。　鶏の肉は旨くて且消化のい丶のは肉の中一等で、毛物の丶やうに臭味も無いため人が一般に賞美します。　その中にもわかい鶏が一等で、病人または胃弱の人に最上の食物です。　老いた鶏は消化もわるいですから充分水煮をし、吸ひ汁又は野菜と共に煮て、ただダシを取るために用ゐると心得るのが宜しいです。

次號から衛生三食見立てと題し、岩間氏の工夫による保健食料をも出します。　食物の取り合せにより色々滋養にも毒にもなるもの、無茶苦茶にはなりません。　この衛生三食見立てといふのは一日に是非人間に入用の滋養を取れるやうに組み立てた物で、即ち朝飯、晝食、及び晩食これら三種類で、大抵中等の家のくらしに相應させた物です。　是から是を一日分づ丶出して行きます。　殘らずでは丁度半月分、それを毎日順々にとりかへて食べ、半月過ぎてまた舊へかへれば始終倦きる事なく愉快に膳に向はれます。　其ため豫告をして置きます。

いらつめ記者

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

文藝美術

細川幽齋和歌の主義漫評(其二)

幽齋は又斯う言ひました、「月といふ前にてありあけなどと詠むわろし。夕月夜などはまだもなり。花といふ題にて散るはなをよむあしきなり。現在にみる体とよむべし」。有り明け月ハ既に落ちかゝッた月、それ故に不祥の心があるろのため月といふ前で有り明けといふなどの幽齋の心でしやう。併し、是ひとつでも歌人の見識の無かッたのが知れます。幽齋は隨分歌人の中でハ錚々たるもの、それでさへ常の活眼には似ず、猶題の支配に束縛されて其外にふるふ勢と持ちませんでした。有り明けは悲慘な意を持つにしろ、境遇に制限を付けるのが詩人の本務と言へましやうか。感情の圓滿具足、折れず撓まず角だゝず、例の英のばるんすなどのやうなのハ勿論歌聖の聖たるものです。しかし其以外に全く歌聖が無いかと言ふにまた決して左樣でも無い事です。悦んで花を見る人もあり、愁へて月に對するものもあり、場合ひが種々に感情の色を染め出すからには假令月が題にあッたにしろ、その月の種類に彼是の區別を置く所由は無いことです。が、また其處に――さうでは有るものゝ――猶多少の理が有るといふのは題意を得る事を歌の主眼とした、その習ひが終に反對の向きから前へ遡ッて歌のために題を縛るなどの癖になッた、それで幽齋のこの論も出て來た事です。

元々古人が詩賦に思ひを詠じたのは題のためではなく、趣意のためでした。それを後世では反對にして仕舞ッて題のために歌をこしらへました。いづれが當か不當かハ言ふまでも無い事、たゞ詩賦歌曲の目的ハ何にあるかと正したなら其目的は感情を徹すより外無いもの、題のために本文を作るなどは以ての外の事です。歌學の衰頽と來した原因の一は是です。

幽齋は又斯う言ひました、「貴人ならぬ人の數ならぬなどよまぬ物なり」。その故ハれんでも無ければ之」。まことに至當な說、痴、愚、拙などゝ自身で言ふのハ一種の傲慢でをかしいとは外の先達も言ひました。世を嘲るか何かで此のやうな言葉をば用ゐるものゝ、既にさうなれば胸の狹さも見える事で、またもし左樣でなく、たゞの謙退で言ふ事ならば全くつまらぬ所爲です。外にまた幽齋は「戰士の身にていさむ心のなどいふ心をよまぬものなり」とも言ひましたがいづれも一理のある事、赤心を枉げて虛辭をならべるのは世

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

に多くある例ですが、是が即ち「信が」欠けた文字で、わづかに俗れどしだけ、俗愛を買ふにとゞまる物です。見わたせば今日の文學界はます〳〵輕浮にながれゆき、虚飾を述べて決して何とも思はぬもの〻多い處、乃至俗れどしの語句を好むもの〻あまたある時代、その向きの人たちもいくらかこの幽齋の言葉について猛省されたいものです。

冬の山路　　いらつ姫

こがらしや　たとす　葉もなし、
みね　やせて　鹿　はやく　過ぐ。
み〻　さとき　ふゆこだち
物の　こゑ　拔けて　あと　なし。

白薔薇

つゆ　おもき　白薔薇の　花　　青山の處女
さき＝いでぬ　わが　垣の　うちに。
うなだれて　ものも　え＝言はず、
にしの　かせ　うらむ　ばかりに。

第七回懸賞文藝得點の分

題　磯の霰に千鳥よみこみ

取捨標準　第一意匠の新奇○第二調及び修辭○此二件を備へた物を一等とする事

○俳句

霰ふるいそにもすむやなく千鳥……小岐須麟徵（ミノ）

ゆふ千鳥羽をのべてまついそあられ……琴水女史（オホサカ）

右いらつめ一部進呈

千鳥だけふみた跡ありいそあられ……井村しげ子（オホサカ）

いろばたへ千鳥よりつくあられかな……坪倉山月（ヘウゴ）

右いらつめ二部進呈

あられにも友よぶ磯のちどりかな……井村しげ（オホサカ）

右第三等賞いらつめ三部進呈

ちどり立つ、なみたついその霰かな……生駒うた子（ナラ）

右第二等賞いらつめ十五部進呈

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○唱歌

いそに　あられを　ふき＝みだす
かせの　さむさは　身を　きる　ばかり、
ある丶　なみまに　なく　ちどり
聲は　あはれを　そふる　ひとしほ。
右…………撫箏　女史(ミノ)

はださむき　ふゆの　たそがれ、　たちまちに
そら　かき＝くもり　おき　くらく、
風ふきて　ハ　なみ　振蕩し、
あられ　飛びてば　磯松　荒る。
あ丶　かの　聲は　なにの　こゑ。
友に　はなれし　ちどり　かも。
げに　凄じの　けしきやな、
げに　いたましの　けしきやな。
右…………桂郷　小史(トウケイ)

番外得點

いと　きよく　はれし　こよひの　つきかげに
み＝わたす　ろらに　雲も　なく、
なみ　ゆりては　金龍(きんりよう)　おどり、
あられ　ちりては　たまと　まがふ。
あ丶　かの　聲は　なにの　こゑ。
友を　いざなふ　ちどり　かも。

げに　おもしろの　けしきやな、
げに　いさましの　けしきやな。
右いらつめ一部進呈

○和歌

打よせてくたくる波の玉あられ
あられぬ磯と千鳥たつらん…………岩永　信成(トチギ)

霰ふる磯山おろし波あれて
蘆の丸やに千鳥啼たつ…………金川善次郎(トウケイ)

風さそふ夕波千鳥聲さむく
磯の松原霰みたる丶…………仝　人

月ならで須磨の磯邊に玉しくは
ちどりなく夜のあられなりけり…………北風　正子(ヘウゴ)

あられふる聲もくだけてあら磯の
玉ちる波に千鳥啼くなり…………小鮭須麟徴(ミノ)

玉あられさそふあらしによる波の
磯邊を寒み千鳥なくなり…………北風　貞信(ヘウゴ)

右いらつめ一部進呈

浪の上にさわく千鳥の聲を置きて
磯邊を過る玉あられかな…………目時　絹子(イワテ)

岩かねもくだく斗の玉あられ
ふせぎかねてや千鳥鳴らん…………仝　人

まちわびしあられか鳴けるいろ千鳥
　はるゝまもなく聲たゆるなり……………塚越眞阿(マシン)

あられふる磯邊をわたるむら千鳥
　沖のはやてをわびてなくらむ……………横山なほ子(トナガ)

なみのよるいそにうきねの村ちどり
　心くだけとあられふるらん……………武市長太郎(ミノ)

いろの家の夢をやぶりしたまあられ
　ねざめのともはちどりなりけり……………愛菊女史(オホサカ)

あらいろにふりしく霰しげゝれば
　かげだにとめず千鳥なくなり……………同　上

玉あられみだれたばしるあらいろに
　心くだきてちどりなくらむ……………日　野(トウケイ)

かしまがたあられふりしく磯の上に
　波もさわぎてちどりなくなり……………中村てい(ルナ)

ふくかせによせくるなみもあら磯の
　千鳥たてとやあられふるらむ……………矢　ざは(トウケイ)

いろ枕よはのあられにゆめさめて
　えばなく千鳥こゑぞさむけき……………小向きみ子(ナカヒ)

風をいたみあられふりつゝあら磯の
　なみも千鳥もたちさわぐなり……………星野きく子(トウケイ)

右第三等賞いらつめ三部進呈

うちよするなみに千鳥のうづもれて
　とまにあられの音ぞのこれる……………窪田こま子(トウケイ)

右準二等賞いらつめ六部進呈

おきつかせ千鳥なきたつあらいろに
　よるなみしろくあられふるなり……………金川善次郎(トウケイ)

右二等賞いらつめ十二部進呈

番外得點

あられの玉、なみのつゞみのうつ磯に
　あれれちどりのうきあしぞたつ……………有本久光(イハレロ)

右準二等賞いらつめ六部進呈

○文章　　　　三坂きぬ(ナカヒ)

覊旅のいく重ね、時は春でも、所れ都でも故郷しのぶ心から積かぬゆめを惱ますもの。まして波よる磯の家を一夜の宿とした時には？　一しきり又しきり降るあられはなまじひに夢をくだくばかり。目につくものは唯雲と歩みをあらふ上天の月、その月よ向つて、妻を戀ふか、友としたふか、三聲四聲斷續させる濱千鳥！　あゝ此時のこの心、身を此處に置いた人にあッて始めて其人の同情に、言葉をよろにして語ることが出來るだけ、とても筆紙には盡くせません。

右いらつめ一部進呈

(未完)

あらかじめ懸賞文藝題をいくつも廣告して置きますから其中で御好みのを御作り下さい。　ついて題により歌に適して文にわはぬなどの物も有りますから題毎に作の制限を置きました。　また今度から色々之に付いて規則とも設けましたから題の終りについてよく御覽を願ひます……いらつめ記者

○第八回題（唱歌浄瑠璃及び文章に限る）
右　歲暮。　十二月十五日〆切

○第九回題（和歌唱歌詩浄瑠璃及び文章に限る）
右　かるた遊び。　十二月廿五日〆切

○第十回題（何でもよし）
右　美人雪夜にイむ。　一月十日〆切

○第十一回題（何でもよし）
右　難破船の圖題　一月二十日〆切

○第十二回題（何でもよし）
右　處女の愛情　二月十日〆切

右文藝應募者心得

第一　題を種にして成るべく趣向を立てるのを尚ぶ事○第二　唱歌浄瑠璃及び文章は各一千五百字以内の事○第三　一人で二種類の作を投せられる人は二種類別々の紙に書く事○第四　原稿には宿所姓名明記の事○第五　原稿は半紙に限る事○第六　第二第三第四及び第五に背くものは沒書。　賞品は廣告欄にわります。

雜纂

手と爪とを美麗にする一切の心得

前號および前々號で身体白色法を出した内猶言ひ殘した個條もありましたが、他日また砒石白色法をも出すことゆゑ、その時に言ふ事として更に今度は手と爪とを美麗にする一切の心得について言ひます。

最も注意すべき第一は冷水または硼砂をとかした溫湯でしばしば手を洗ふのを怠らぬ事です。　處法は顏などの白色法と同じでわるやうなものゝ、顏と手と相違する點れ比較して手の方が顏よりよごれ易い、そのため洗ふのも數多くしなければならぬ事です。　ひゞ霜焼または垢ぎれをこしらへるは最も嫌ふべき事、これは前々に言ッたとほりポマドンヌールを塗ッて治さなくてはなりません。　その次ぎに必用なのは寒中すこしでも手が冷えれば火に炙る、これがわるいので、これがため早く皺もより、また霜焼なども出來、かつ色さへもわるくなります。　それ故、手が冷えたらばたゞ兩手で互によく摩擦するに限ります。　摩擦して可なり熱が出たところの麗はしさは玉手とでも、膩脂とでもいゝやうの無い程です。　手の美麗法は是です。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

實に手先きや爪のうるはしいのは淑女がたの人品に關係するもので、たとひ顔ばかりが花のやうでも、それに亞いでよく人の目につく手先きや爪がうるはしくなければ更に品格をたかく爲る事は出來ません。　で、爪、これが又一種の化粧を要するものです。　爪が薄紅色にうるはしいのは如何にも手先きの美麗を加へるもので、かつ元々爪が薄紅色であるのは健康の身体のしるしですから一目見た處もつとも平和、完全の美を感せさせます。　その爪をうるはしくするのに色々な法もありますが、結句いらつめ第十三號に出したのに越すものは無く、即ち讀者の御便利のためこゝにそれを委しく說明しましやう。

即ち稀硫酸二ドラクマ、沒薬丁幾一ドラクマこの二味を交せて液をつくり、更に上等の白石鹼（白色で上等ならば何でも宜しいです）で爪及び爪際を手の指でよく／＼洗ひ、了ッて冷水で洗ひきよめ、それから前の液へ一寸爪をひたすのです。　稀硫酸の度にもよりますが、それが濃過ぎさへしなければ少々の時間は爪をひたして置いても宜しいです。　すべて硫酸は汚れを去るに用ゐるもの、是で洗ふのが爪際をあらくもしず、もつとも宜しい法です。

諸色取り合はせ方

色は互に合ふのと合はぬのとが有ッて如何にうるはしい色でも合はぬ性質のを二取りあはせても更に何の甲斐も有りません。　この事については淑女方及び粧飾專門の人は經驗上中々くはしいものですが、中には己が一個の好み有るため知らず知らずをかしな取り合はせをして具眼者からも笑はれます。　色の取り合はせ方が法にかなッて居れば、つまらぬ物でも大層立派に見え、品よく見え、優美に見えます。　そして室內をかざるにしろ、着物を取り合はせるにしろ、この心得は人間だれでも有るべき事で、言はゞ此心得の無い人は野蠻、即ち美術思想ノ無い人です。　いらつめ方は或は半襟あるひは帶或は袖口或は下着あるひは上着と撰み合はせにつね／＼苦勞なさるもの、從ッて色のとりあはせを知るのは最も必用です。　左にしるすのは色の互によく合ふ物を對させたので、ちと大言のやうですが、決して他に類の無いほど綿密に記したのです。

其一　赤と綠

赤とは紅、緋、淡紅、薄緋などの總稱で、綠とは竹色、萌え黃、黃勝ち草色、藍勝ち草色、濃綠青、薄綠青、綠青など

の總稱です。　すべて赤と綠とを取り合はせれば如何にもよく合ひますが、一体の風韵として此取り合はせ方は何となく勇ましく、きらびやかな色合です。　それ故出産婚禮出陣及第開業など、めでたいやうな、すべての喜び事の時にこの色合ひを用ゐるのは最もよろしいので、また人によッて區別すれば若い婦人には可なり多く用ゐてさしつかへない色ですが、中年以上の婦人、小供で無い男子などには少し用ゐるより外決して用ゐてはならぬ色で、また老人及び中年以上の男子は全く用ゐぬ方が宜しいです（但し非常な老人は例外）。

二　靑と橙

靑とは藍、薄藍、紺靑、紺などの總稱で、また橙とは橙、黄、朽子、玉子などの總稱です。　此取り合はせ方はをとなしい處に何となく爽な色合ひですが、すこし淋しいといふ處をば免かれません。　ことに靑が勝てば猶更です。　橙が勝てばそれ程で無いだけです。　喜び事に、それ故、用ゐぬでも有りませんが、外に赤を添へれば申し分なくなります。年齢にかゝはらず一般によく通じる色合ひです。

時間と物と人との眞の價を知るものを豪傑と言ひます。

女子用文章獨學び（第二）

意味をよく通じさせ、そして無益なかざりを添へぬ、是で手紙の文の秘密は盡きて居ます。　さて其心得を以て文にのぞめばまづ何うするがいゝか、是からそれを述べましやう。

文の体裁

文の体裁、言ひかへれば組み立て方は、第一冒頭、第二、主意、第三結末、これだけです。

冒頭とは文の最初にかぶらせる挨拶で、今日普通の文言は「拜啓」です。　「一筆啓上」とか「寸楮拜呈」とか、又は何々といふのは從來の式ですが、すこし簡を欠いて居ます。それ故に今日は「拜啓」と書くだけで澤山です。　「拜啓」を別に言ひかへて「拜稟」とか「拜呈」とか言ひますが、字面のすこし互に違ふだけ、大体の意味は同じやうな物です。すべて此種類に幾種も異語同義のあるのは文學上もつとも嫌ふべき事で、それ故これは只「拜啓」と一にさだめて書くのが最も眞面目で宜しいです。

冒頭につゞいて從來の文章には「益　御機嫌よく」とか何とか渾べて先方を祝ッた心の文字を挿みますが、是は實にそれを用ゐはじめた昔こそ實情で書いたにしろ、今日は全たく

儀式だけの物で何の益をも爲すもので有りません。　一概に儀式と言ッても場合ひにより捨てられぬ物もありますが、此日用の手紙の文にまざ〳〵とした儀式を重々しく用ゐて居るのは時間も何も思はぬ間の仕事で、あまり好もしく無い事です。

まだ〳〵拝啓を拝稟と書きかへる程無用の事でもありませんが、兎に角心すべき事です。　曾てある米國人が本國の雜誌に通信して、日本人の手紙一尋は米國人の手紙一インチだけの意味もふくまぬと言ッたのは稍過ぎた評ですが、しかし又左樣言はれても從來のまゝの文では仕方の無いことです。

それ故に日用の手紙には第一こゝに目を注め、はじめ冒頭に拝啓と用ゐたら直に本文の趣意にうつッてそれを述べるのが宜しい事です。

貝殼が浪の音を吐く

西洋に見出しの通りの諺が有ッて　婦人の内には之と信じ貝殼を耳へあてると海の浪の音がすると言ッて不思議がッて騷いで居ます。　が、是は理のある事で、貝殼の中は色々に彎曲して且なめらかですから、それへ空氣中の音が反射して實は色々に聞えるのです。　一寸妙なことです。

音樂大家もざアとの傳

夢のや口述　みさ子筆記

後「モザート」は故ありて、此朝廷を去らんとの出來心を生じ解職を帝に乞ひしかど　帝は眞實に「モザート」を愛せしかば、容易に其請を允さゞりし。　尋常利欲の徒ならんには此機に乘じて、忽ちに俸給の確定を求むべけれども、「モザート」は正直なれば此の如き卑劣の振舞を屑とせず只自然に一任して、日を送りしに幾もなくして帝は俸給の事に心付き或る臣下を召して、此事を計られしに不幸にも兼て「モザート」を敵視するものなれば　故意に其額を小にし僅々八百フロリン（一フロリンは我五十錢に當る）の小額にて充分ならんと上奏せしかば遂に此の薄給を與ふるとはなれり而して此後とも更に增給の沙汰に及ばざりし蓋し此給は「チアンベルコンポーザ」（宮中用曲の撰樂者）の職を奉ずるによりて受くるなれど其實名目だけの閑職なれば實際は　甚だ閑暇の日を送しと　或日朝廷より幾許の俸祿を得るやと、改て「モザート」の年齡は十九才なりきさて「モザート」は　己が學業の進步して　其名聲歐洲中に轟き渡るを見て初て立身の道を思立　母を奉じて佛國の巴里に赴たり、　蓋此地歐洲文明の中心なれば　立身の道を求

るに甚た適當なるを以てなり。　然るに不幸にして其母ハ此の地に病死せしかば「モザート」は悲歎遣方なく、遂に其志望をも得達せずして此地を退たり、そも「モザート」の巴里を退たる原因ハ無論母の死を悼なるなれども別に「モザート」の歸轅を促したる小原因あり。　ろは他にあらず　元來佛人の風俗は極めて輕佻浮薄にして其聲樂の如きも、亦此趣を免かれざれば「モザート」の好尙と佛人の好尙とは、自から氷炭相容ざるなりされば佛國にては勢ひ聲樂の作を全廢して器樂のみを作らざるを得ず、これ其技術上に一大制限を被るの理なれば「モザート」の堪忍ばずして遂に母の死去を好機として此地を去たる所以なり。　「モザート」は巴里滯在中一曲を作れり　そは「スピリツチユル、カンタ」なりき、千七百七十九年「サスルボルク」に歸りて間も無く「オペラ」を作れり又「パヽリア」侯の囑に應して「ミユーニツク」の劇場用の「オペラ」を作れり、時に「モザート」の年齡廿五才なりき　偶ま一婦人の意に適せるものありて「モザート」は之に愛情を寄せ居たりしが　彼の「エドミニオ」の一曲は專ら其戀情と自己の矜氣とを發表したるものなりしと　されば此一曲ハ「モザート」自身には自作中無二の妙出來と信せしと見えて　以後の作曲には往々此曲より意匠を抽出し若しくは摸範を取りし、府の官員より尋ね來りしことありしかば「モザート」は之に答ふるに只一行斗りの短文を以てせり。　其文に曰く臣が職務の俸として尙餘りあるも、臣が技能の祿として誠に從ふなりと此文甚だ簡短なれども聊か不滿足を訴ふるものゝ如し、千七百八十二年に「モザート」は「レインレプメント、セライル」と名くるを新作せり　之を演ずるに際して「ショセプ」第二世「モザート」に云はるゝ樣　此曲妙は即ち妙なれども符數餘り多すぎてちと繁雜の嫌あり少しく修正してはいかにと然るに「モザート」は此の曲の趣味を遺憾なき程に顯すにハ、是非彼樣の作法を必要とすとて改正することを肯せざりしと。

大日本文學史編纂

この文學隆盛の世の中で文學史の無いのハ最も殘念な事、一二その道の人にその編纂をこゝろざして居るものも有りましたが、猶まだ完成とまでは運ばなかかッたところ今度三上參次氏其他一二の人が力をあはせていよ〳〵近々に發兌する事も出來るまで編纂にかゝッて居られるとの事です。　日本文學世界のため何より喜ばしい事です。

日本文學者の傳記米國雜誌に上る

見出しからして大層な事、しかし事實です。　米國諸雜誌の寄書家、ボストン府住ぐりふとす氏から日本の高橋五郎氏へ托して明治以來日本の文學に與ッて力のあッた文學者、政治家、新聞記者其他維新前の小說家などの肖像、綿密な傳、各家の文學論主義、著作の名、世評など一切網羅して更にそれを英文に譯し、米國の雜誌に上せ、廣く世界に其名を傳へたいとの事で、その以來高橋氏は始終奔走されて居ます。撰み出された人數は婦人を併せて前後三十餘名、遠いところは馬琴や北齋(畫工ながら特別に)、ちかい處の文學者では、春のや主人、美妙齋主人、二葉亭四迷、饗庭篁村、學海居士紅葉山人、南翠外史の諸氏、其他女性では佐々城豊壽女史などゝの事です。　ことに面白からうと思ふのは各小說家に限り、それ〳〵手くばりを定めて互に互の人物、性質、履歷、主義などを許し合はれ、その文をそのまゝ譯して出されるとの事で、美妙齋氏をば紅葉山人が、紅葉山人及び篁村氏をば美妙齋氏が叙されるとの事です。　兎に角日本の文學界も段段おもしろくなる事です。

饗庭篁村氏の隱遁

清行の勸めを用ゐたなら菅公も失敗はしませんでしたらう名將は戰ひ克ッてそのまゝ靜に陣ををさめるとやら、今日篁村氏の名譽は外に比類の無いばかりの勢ひ、そのところやゝ隱れられるとの噂、篁村氏のため最も喜ぶべき事、また望ましいことです。　春のやかくれ、二葉亭のがれ、其他某氏などもまたしばらく文壇を明けわたす心得であるとか言ふ世の中、また篁村氏のやゝ筆を歛められるのは先退者のため賴もしい道づれです。　われ〳〵は今後亂雜な著作の澤山に出るのを篁村氏に望みません、たゞ念入りの名作をゆる〳〵作られるのを望みます。

双頭の男子

奇怪！　双頭の人！　不忍池の畔に住む人が一夜暗に乘じて散歩して居ると池の岸に黑い影。で、すかし見れば頭の二ある人があるいて居ました。　おどろいて更に近よッてよく〳〵見れば――多分西洋人――夫婦（？）相たづさへて夜色をたのしんで居たのだとの事です。

僞造橙花水及び眞正橙花油

橙花水は硼砂と同じく化粧には必用なもので、それ故近頃之を買ふ人が多くなりましたが、何を言ふにも値の高い物、それがため終に藥舖の中ではその僞造品と發賣するやうに爲りました。　われ〱の知るところの僞造品はなか〱巧みに出來て居て、たゞ見れば殆んど欺かれます。　これら僞造品は大抵一磅廿錢以上三十錢以下で、このくらゐの値でとても眞正の橙花水が得られるものでハ有りません。　眞正の橙花油ハ一磅五圓、それに準じて眞正の橙花水ハ可なり高直な物です。　これ一ツでも僞造といふ事は知れます。

これらの僞造品は大抵左の法で製するのです。　即ち胡麻の油に橙花油をすこし滴らし、それを水にとかしたのです。是ならば廿錢以上卅錢以下どころか猶廉價で賣れる譯です。世間この藥と御用ゐの方はよく御注意なさい。　素人目にハ中々わかりませんから然るべき藥劑家か何かの保證を得てその後御もとめなさい。

友と敵　　敵とにくまぬ者ハ敵に憎まれず、友をそしらぬものは友にそしられぬ。

腫物其他の痕と速に去る法

腫物その他の痕と去る法の中で最も成効の速でかつたしかなのは茯苓百匁、疾痢十匁、鳥粉十匁、姜蠶十匁、蛇退皮十五匁、小豆百五十匁右を細末にし洗ひ粉にし、一日十匁づゝ常の糠と同じ分量にしてよく洗ひ、後例のポマドンスールかハンドコロンを塗るのです。　かならず早く成効が有ッて、一切の腫物の類の殘ッた痕をば充分に除くのみならず、痘痕などでも大抵うすいのハ取れます。

答　書

胡瓜青づけ法　　無害の青づけ法は晩手の色のいゝのを取り、常のとほり鹽につけ、三日ぐらゐづゝ間を置いて三度つけかへ、終りの時漬けた胡瓜の上に眞鍮の灰を三寸あまりかぶせ、重しを強くして置けば美事な青づけが出來ます。　これハ胡瓜に限らず花の色をも變じません。　試みに胡瓜の花とも少しあハせて漬けて御覽なさい、きつと美事に出來ます

右……答者……よしね（ゆせ）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小説

その三しづく

美妙齋主人

金錢の慾にしばらく呑まれて親子愛情の慾をわすれ、心づけば大事の娘の位牌を―あら火！惡魔の舌か、亡者の息か、はや燃えうつッたわが家の軒先き！

「これ、何を……阿母さん」。おはてゝ火の中へ飛び込まうとする阿今をおさへて親類が叱りつけねばかりに差しとめても返辭らしい返事は無く、「わすれ物が」と一言いッたばかり。「わすれ物なら私がとッて來るから、婦人はもうおぶな……」

言ふ間もある事か、ふりもぎッて戸―既に火でそりかへッて居る―とはねのけて……同時追ひすがる親類、たゞ追ふばかりでいつか家の中へ……

はいッて見れば、急忙の折りながら、おゝ目にもつく、娘が病んで居たそのまゝの坐敷さ、藥瓶、見舞ひ物。これはかりといふ意氣ごみで腕をのばして掻いつかみ、やゝ懷へ入れる間にも、位牌の金泥は側の猛火をてりかへして涙に重い目に晃り。

やれうれしいとは思ッた物の、見れば火は既に天井にもかゝッて節無しの杉をひら〳〵と這ひわたるろの凄じさ、その間右ひだりから噴く金粉―おついと思ッたのは最初の內、ろの塲合では早それらの感じも無いほど。たゞ烟にむせまいと思ふ一心、這ふやうになッて歸らうとしたものゝ、一面の烟で戸まどひするばかり。多分一途にはいッた親類でもあること、此方へと言ッて力をきはめて引くやうな現の心持ち―その間、發矢、猛火、眉を焦がしさう。風が加はッたか車をまはすやうな炎の一たけり、はッと思ッたやうで、そのまゝ……

＊　＊　＊　＊　＊

＊　＊　＊　＊　＊

其四しづく

うつら〳〵とした心持ち、どんよりとした目をかすかに開いて枕元を見れば、笑ひ顏をして坐ッて居たのは千塚でした醫者の。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「いかゞです、御容體は?」 言ッた聲も寸分ちがはぬ千塚、おのれ仇敵と、疲れた身體ながら怨みで目は一杯。

「飛んだ御危難で厶いましたが、もう大丈夫です。 御氣と御丈夫になさい」。

それにしろ、何うして千塚に自分が世話になる事やら譯は更にわからず、わからぬ儘不審の目を四邊へめぐらせば、おや！ 親類たちも側に居ました。

身をかへりみれば布で縦横に巻かれたばかり、片頬はひりひりと痛むばかり、何故にかう爲ッたのか、此處は冥途かそも〱娑婆か。

「おッかさん」、 聲とかけたのは親類の一人でした、「もう御氣を御大事に……まア御喜びなさい、あなたの命はこの先生に救はれたのです」。

何をいふ、頼みもせぬに、頼む事も無いに。

「阿末さんの御位牌を御出しになるッて貴母が燒けて居る中へ飛び込んで、そしてその内に火がまはッて實は貴母は倒れて御仕舞ひなすッたゞです。 が、好い鹽梅に千塚さんが其處へ……」

言ひかけては語る身にも實情のなみだがはろり。——

「で、是ばッかりは素人わざでは行かぬ事、貴母はもうそのとほり煽りをくッて片頬に火傷を爲さッたばかりか、それで氣絶まで爲さッて……それから直に、出した疊へのせて先生の此御宅までおくりとゞけて御療治を願ひましたので……」

何處やらちがッた家と思ッたのは矢張り本當、それでは千塚の家に居ることか。

「まづ命に別條なく斯う御恢復に向ひましたから最う安心です。 實に重ね〱色々先生にはお世話になりました」。

あゝ聞く身の驚き、昨日までの仇がたきが今日の親友となッたとは！ 聞いたばかりで、身が身で揉まれるやう、兎に角うらんだ内心、あゝ口惜しくもあり、はづかしくもあるやう。 阿今は涙に溺れてたゞ火ぶくれの手をあはせたばかり、ひれふしてかきくどく聲が一聲。——

「も……もッたい……」

(をはり)

通信問答

心得第一　通信問答は無手數の事○第二　御問ひ合はせの事が答へを載せる雜誌の八號前にあればそれには委しく答へず、只其所在を言ひます○第三　特に普通に有益と認めた問ひには廣く答案を募ります○第四　御問ひ合せの文字並びに文章は明亮に書くべき事

菊子様へ　（一）切り髪の早く伸びる法。　すべて髪は櫛の齒を多く入れるだけ伸びる物で、八丈島の女の髪の長いのハ始終櫛の齒を入れるのです。　切り髪を伸ばすにも、其故、日に幾度となく櫛を入れ、そしていらつめ第廿九號にある髪油をよく塗るに限ります。　（二）脚氣預防法　濕地に住ます、坐るのと歩くのと時間をよく平均させる様にするのが第一です。　（三）下駄も靴も脚氣には害です。　いゝのは草履上靴ばかりです（四）昔は目下にも殿といふ言葉を用ゐましたが、慣用で今日ハ用ゐなくなつたのです。

吉野みつ様へ　毛を生す法。　いらつめ第廿五號に出た法、即ち枳殼を丸の儘黒燒きにし、等分に眞菰の灰を交ぜ、それを胡麻油で解いてぬればは必ず毛は生ます。　Beautiful Lady　婦人傳洋書ハ大抵イングリッシ、ウイメン或ハフレンチ、ウイメンなど、言ッて二圓前後であります。

昔娘さまへ　（一）ヒビ霜燒け垢切れの藥は　いらつめ第廿八號で處方を出したのを南神保町翁屋でポマドンヌールと言ッて賣ります。　一壷廿五錢（二）仰天子ハ大坂に居る人で本名武田頴、花村居士ハ本名烏居林平、太華山人ハ本名高橋七郎（三）流行の勢のある婦人肩掛は隈取りの鮮な色合の大物です。

疑問　鹿皮の手袋を普通で洗ッた處硬くなッて用に立たぬ是を柔くする法…石川信子○第卅二號疑問　牛肉馬肉簡易鑑別法及び屠肉死肉簡易鑑別法…増野房人○しつかりした手跡の女用文及習字手本…昔娘●右確答の方にハいらつめ一部進呈●質答、第一は十二月十五日、第二及び第三ハ十二月八日、第四ハ本月限り。

●第卅號餘興解答及び解答者

（一）目が見ねぬ（二）カ、シ或はカゴ或は貸した貸した或ハニゲサンレタ或はカヽサンカ（三）床の間を見てはてるい故菊を見て何本さいへばそれでよいといふ頓智謎（四）目ばたき（五）ナカサキヤノヤキサカナ又はナガキサホノホサキカナ（六）ゴュヨ即ち十五●今度も皆答者の無かッたのハ殘念でした又五題解答者もありませんでしたが、卅二號謎ハ是より容易故折角御申て下さい。

廣告

いらつめ
合本　十一十二兩月分
豫告の通り合本が出來ましたから來十二月一日から發賣します●其体裁等の如何はど優美秀麗かは一本を御求の上御品評を願ひます●紙數百廿六ページ●定價十五錢五厘府外郵税二錢●廿八號から卅三號まで殘らず合本
成美社

いらつめ廢本非常廉價賣捌の處瞬く間に品切となりましたゆゑ更に普通本を廢本と同様の廉價で賣ります但し非常の廉價ゆゑ割引を爲ません
一冊三錢郵税各五厘●十二號廿四號皆無●前金領收の上發送
成美社

米國新製
絨氈羅氈塵去り器械
堅牢無比、便利一等、切地を損せずに秋毫の垢埃をも去る器械○貴紳の住宅に最も必要の品○一個四圓五十錢
專賣　神田區通鍋町十番地　高木商店

世界第一白色法劑料
○ハンドコロン　一瓶七十五錢
寒中必携化粧品おしろい下
ポマドンヌール　一壷廿五錢
おきなや
神田區南神保町

懸賞文藝賞品
一等　清親良信二氏の内御好みの畫家の手に成った、畫帖だけの大きさの肉筆絹地彩色畫一面○二等いらつめ十二部（前號の卅部は誤植）○三等三部
成美社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

樂器類英國玉玻璃花瓶購求紹介

今度成美社で諸樂器類其他二三種の新製品の**購求紹介**をしますから御用の御方は御申し込み下さい**一切保險附**しかも**無比の廉價**

れるがん

樂音舍製造オルガン第一號形拾八圓○第二號形二十四圓（普通價二十五圓）第三號形三十二圓（普通價三十五圓）第三號新箱形三十七圓（普通價三十八圓）第四號形四十五圓○第五號形七十圓○第五號新形五十五圓○第六號百圓○第七號形白三十圓（普通價百五十圓）其他種々

舶來オルガン○メーソン第一號卅九圓○メーソン第二號四十九圓○ウ井ルコックス第二號四十五圓○ウ井ルコックス第三號六十圓（普通價六十五圓）○英國製第四號七十圓○ウ井ルコックス第五號九十圓○ウ井ルコックス第六號百三十圓○ウ井ルコックス第七號百七十圓其他種々

ぴあの

ピアノ○クラマー製百五十圓○英國製百七十圓○二百圓○二百卅五個○米國グラン製三百五十圓○獨逸製二百七十圓○三百圓○三百五十圓等各種

ぷッいれりん

和製○四圓○四圓五十錢○五圓○六圓○七圓其他種々

舶來○九圓○十圓○十二圓○十五圓○二十圓○廿三圓○廿五圓○廿八圓○三十圓○四十圓其他

附屬品　船來糸一組八十錢以下（一、十五錢、二、十七錢、三、十八錢、四、三十錢以下）

駒十五錢

ヤニ、十五錢、廿五錢、三十錢、五十錢

調子笛一音六十錢○二音一圓○四音一圓五十錢

外に樂譜用紙、音樂書籍、手風琴、オルゴル等

代金れ遞送料をのぞき**郵券代用不苦**

英國製各色玉玻璃花瓶含漱具　一個二三圓以上　色々有ります

成美社

いらつめ第卅四號目次（明治二十二年十二月八日）

●挿畫……花鳥圖枯葭に鴨（色刷石版）狩野友信
○押し繪新意匠水仙の納潜
●小説……心づくし第三回上……毛布野女史
●家政……作押し繪方り第二……石原一枝孃
函の張り方（圖入り）
○衛生料理法（雜菜第二）……岩間芳松
不消化物名目＝精進揚げの事
○衛生三食見立て第一日分……岩間芳松
●文藝美術……東西美術相互の影響（第二）
○美妙齋主人の新著長歌
○第七回懸賞文藝褒點文章
●雜錄……色の取り合せ方＝文章符號の解釋＝新年歲暮クリスマス用名刺見本種類＝同狀袋見本種類＝口繪枯葭に鴨の解釋＝束髮少女の貸本屋＝茶の汚點を去る法＝
●寄書……いらつめの一大改良を許す（金富民子）花及び色について（大江りん子）○懷かしき故鄉（山本良）○諸孃へ御伺ひ（竹村うめ子）
●通信問答……銀杏の葉と書籍＝切り疵療法＝葡萄から製した酢＝神經的病の藥＝ポメータムデパイン＝硼砂＝添削規則＝皮膚病醫者＝手足の皮のむけるのを治す＝月の桂、久方の光り、うたかたの泡、霞の糸遊の意味＝毛を縮れさせる法＝疑問
●餘興……新題

社告及び社則　いらつめ一部並製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二十九錢郵税共金三十五錢、二十四部金五十七錢郵税共金六十九錢、三十六部金八十四錢郵税共金一圓〇二錢、四十八部金一圓郵税共金一圓二十四錢●別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六十五錢郵税共七十五錢、五十部金一圓六十五錢郵税共金一圓九十錢●並別兩製共前金領收の上で無くては差上げぬ事●府內に限り無郵税●毎月四回（八日十五日二十二日三十日）發兌●金子御差し送りの手續きは郵便小爲替なれば神田郵便局とある處に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事●郵券代用は郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割り增しなれば妨げ無い事●見本は五厘切手で並製三錢別製四錢領收の上差上げます●廣告料一行金八錢、割引無し●第廿八號から本社から賣り出す證として雜誌の表紙に成美社の捺印を加へましたから是を目標として御求めを願ひます。捺印の無い雜誌に就いては本社で一切責に任じません。捺印の無いのを御求に爲ッても代金御支拂に及びません。

從第二十八號至第三十七號十部版權所有

新案別製本出版の社告　度々の御注文により第二十六號からいらつめ別製本を作り、永く保存に堪へるやうにしました。（一）別製本は美麗堅牢な紙に本文を印刷する事（二）別製は容易に再版をせぬ事ゆゑ御注文は至急で無ければ賣れ切れになります（三）別製並製共記事は相同じです（四）定價は前にあります（五）第二十六號第二十七號及び第二十八號の別製本は悉皆賣れ切れになりました。

いらつめ合本の社告　西洋諸國の婦人雜誌では大抵一仙か一ペンニの月三回以上發兌でそれを一ケ月の後になり、一ヶ月分だけ合本し、表紙を付けて賣り出します。いらつめでも是に倣ひ、來る十二月が過ぐれば更に十二月分だけを合本し、美麗な表紙を付けて賣り出します。定價金十錢五厘郵税共金十二錢、紙數八十四ページ、總目錄付き。府內無郵税。但し本十一月に限り十月の第廿八號から十一月最後の三十三號に至るまで總六册を一部に合本して賣ります是は續稿になッた記事が彼是ある爲めです是は定價十五錢五厘郵税共十七錢五厘です。

注意

本號には色刷押繪石版精畫作方●美妙齋氏の長歌及び新年用名刺狀袋見本が出て居ます。

明治二十二年十二月七日印刷
明治二十二年十二月八日出版
發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎
印刷人　同市同區同町同番地成美社方寄留　佐野忠吉
發行所　東京市神田區平永町九番地　成美社

いらつめ第三十四號

小説

第三回上

毛布野女史

警視廳内の一室に兩人テーブルをかこみての密談。一人はフロックコートの着こなし振りも嚴めしく、一人は雙子の縞の羽織着流しのまゝ椅子に凭れり。素より密談のことゝにしあれば、充分聞き取り難けれども、折々洩るゝ話説の顛末

「其處が第一不審なのぢや。尤も店はあないに繁昌はしちとるちふものゝ實價が廉いから其割にア利益かるまいがのゥ。して見れば何樣に慈善心があつたにしても何處ぞに財源がなくつちやならない筈ぢやて。それに彼奴の素性は一體何者だかわかッちよるか。なに乞食——襤褸となる——どうもいよ／＼怪しい奴ぢや。そこで此後は汝が何うする見込ぢや」。

「へい其儀に就きまして實は今日伺ひましたが、御存の通り早や一ヶ月も彼奴の家に取り入つて見ましたが一向手かゝりは着きませんでした。處へ昨日のことで信種が遣ッて參りまして——夫れ故其方から手を廻す所存で」。

「やア信種ちふは例の娘の親ぢやないか」。

「へい夫につきましては兼ての——」

「うゝうゝなァる程。したがさう甘く往くかいのゥ。若し夫れが——何卒…………」。

「いや御心配には及びません。委細呑込みました」。

「何んだか變な氣持になつて來たぢやて」。

と斷れつ續きつ打漏るゝ、話の始終と綴り合はせ、意ありて之を判斷すれば、理由あるやうにも思はるれど、何をいふにも小聲ゆゑ、處々を聞き洩らせば、委しき仔細は知り難けれども、森尾彌七の身の上に不審のかゝりしといふだけは先づ推測を下し得べし。個は當時警視の探偵課長鵜尾禮二と探偵係八瀬仙作が對話の端々、掩ふべからざる所もあり。且此の密議は信種か始めて今田屋を訪ひたる、その翌日のことにして、話の内に知れたればなり。

斯く探偵の身の上にかゝるべしとは神ならぬ森尾彌七はもとよりのこと、信種とても知る由なければ、只管開店の相談のみ外に餘念あらざりしが、それさへ頓に纒りたるゆゑ、玆に神田區神保町に明店あるを借り受けて、最と景氣よく開店せり。お琴が兼ての冀望もあれば、毛糸の織物 誂 處と看板

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

をさへかゝげたるに、實に此の近傍は書生の巣窟、通りかゝりに足を止めて、空しく内を覗くもあれば、態々來ては要もなき毛糸を買ふて歸るもあり。　殊に靴下手袋などの註文意外に多くして、お琴一人の手のみにては到底應じかぬるゆゑ、その譯いふて謝絶れども、直段の高下は素より論せず、是非にと強つて頼まるゝ、愛顧の厚さに絆されては、つひ止を得ず引受くる其數なか〳〵尠なからねば、人を雇ふて製造させても尙は期限には間に合ひかねて、催促さるゝ面目なさ。其の度每にお琴が出て、最と懇ろに詫をいふに、孰れも機嫌を損ずるものなく、却ッて滿足せし体に不平も言はずかへり行く。　抑も開店の間もなくして、斯ばかり繁昌するに至るは何がな理由のなからずやはと、詮議たてするまでもなし。完くお琴が世に優れし標致は早くも書生の間に傳へて評判日に高くなりたるために外ならず。

家政

押繪作り方（第二）

石原かづえ子

二　箱類の張り方。　箱に押し繪をつくるには格別注意して臺紙と斷つが宜しいです。　四角な箱をたつには最初自分の思ふ處の回りに金箆で筋を引き、三ッに折り、一方は半紙か美濃紙で端と端と離れぬやうに繫ぎ、その後切れ地を張りつけるのです。　切れは何に限らず嚴しく伸ばして張るに限ります。　中張りは千代紙でも色紙でも勝手次第、蓋の方も下の入れ物と同じに張るのです。　然しながら蓋の上の方は別に蓋に合はせ、橫張りの切れ地の色より些し違ッた色で張り下と合はせ付けるのです。

扇子形や丸形の箱は少し違ひ、臺紙を組み立てる小丸形の木が入ります。　其木に臺紙をあて、曲げながら裏表から半紙で張り、丸い形に臺をし、切れ地を張るのです。　張り方は前の四角の箱と同じやうにして宜いのです。　が、やはり丸い處は切れ地を一分二分づゝ切り、表へ皺の出ぬやうに注意しなければ爲りません。

圖のやうな、扇子形の箱を作るには前にも言ッた通り、下箱からさきへ張り、蓋になる方を後で作るのです、　さて水

仙の摸様、葉は濃緑、薄緑の二色で、切れ地は縮緬でも絖でも宜しいですが、裏葉は淡緑、表葉は濃緑にします。　又葉花とも青梅綿一枚ほど薄く入れると大層形がよく見えます。が、兎角初學の人が綿を入れると多く高低が出來ますから、よく鏝をかけるのを怠らぬやうに爲さい。

花は白の切れ地で張り、一片づゝ張るが宜しいですが、中の匂ひは黄色の切れ地で張るのです。　花の軸はヒハ色の切れか淡緑かで張り、花の下の小さい葉柄は淡茶で張り、又根ハ淡水色で張るのです。　臺切れは白茶か紅か又ハ鳶色がよく合ひます。

改良實用衞生料理法(其六)

元鹿鳴館料理方岩間芳松

雜菜料理の部

一　食物不消化及び調理法の噺し

蒟蒻は食物中一等の不消化品で、滋養分の少ない故、此書中調理法と除く○南瓜此品も前同様な品故記るさず○大根は水分多い物故、一品煮は惡く、交合物を見計ひ用ゆ○慈姑は滋養分有て不消化なる故、皮付の儘能く湯煮直して、皮を去り、用ゆ○筍、牛房、此二品も前の品に同じ故、能く湯煮をして、用ゆ○蓮根は同じ不消化物故、これは皮を後にて去り能く湯煮して、用ゆ○款冬、この品は筋多くして養分少く、一品食は惡く、他によき物を合せ、用ゆ○冬瓜此品は消化速かなれども、養分は少し○百合此の品は滋養分に富み、消化最も宜敷、故に病人等の食品に適當の物です。

二　精進揚物の噺し

精進揚と稱して種々野菜類を生でかたき所へ、衣(うどん粉の類)をくるめ、胡麻油で揚げ、食するは是迄の普通調理ですが、實に消化機の大害になる物ゆゑ、是と調理するには、植物油を脂肪に代へ、衣には鷄卵を加へ、消化の惡い野菜(牛房、人參、菊、)(喉元の折別して柔らかにしてもちふ)は胡椒を振ッて揚げるに限る事です。

大根、八ッ頭、芋、人參、油揚げ先づ皮を剝ぎ去り、鍋に品々生で、入れ、湯煮をして油揚げと入れ、胡椒を振り、酒に砂糖少し加へ、鰹節を入れ、味を付けるのです。

衛生三食見立て 一名保健食料

岩間芳松

第一日分………朝食
皿…煮奴豆腐玉子引き(豆腐小半丁、玉子一つ)◎猪口…鐵火味噌◎飯(米一合二夕)

第一日分………晝食
皿…鰤の油醬油てりやき(廿匁)付け合はせ…ほうれん草の胡麻仕立て◎椀…生わげ湯婆(一錢だけ)切り身魚(五匁)口柚◎飯(米一合四夕)

第一日分………夕食
皿…鷄のバタ燒き(二十匁)付け合はせ…煉り馬鈴薯牛乳五夕入れ◎椀…摘み海苔掛け蠣の汁◎飯(一合四夕)

文藝美術

東西美術相互の影響(其二)卅二號つゞき

上野の油畵展覽會については既に諸新聞雜誌にさまぐな評も出、そして其評の歸する處は洋畵一般にあらはれた進歩の喝采でした。一般に現れた其進歩については吾々も殆ど是等の評者と同感です。が、それに同感を表すると同時、──吾々の僻目が──意匠に日本風のが少かつたこと即ち是が惜まれました。

そもぐ是は重要の問題です。今こゝに二種正に反對した趣味の美術が有るとして、さて其二種は兩ながらまだ完全と言へぬと決め、双方から取捨折衷するに當ッて何れの方針によッて宜いか、是と決めるのは洵に難事、今日日本畵を主張し、或は西洋畵を尊崇する二種の反對論は此一點から出たのです。

油畵を修める日本諸畵工諸家の方針は果たして何の點に向ッて居るか、吾々はまだ是等の口から出た演說、筆に發した論文に逢はぬため、よく解し得られません。が、今上野の展覽會に臨んで諸氏の作についてつらぐ見ればその方針は洋畵に向ッて居るといふ事の判斷は付きました。元より既

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に洋畫に身を委ねられた諸氏の事、或はそれに違ひも有りますまい。　と爲れば前後三室とはして掛けつらねられた畫の中に西洋の趣向を取ッた、いや、奪ッた物が十の九を占めて居るのも又無理の無い事です。　が、是で日本畫（日本從來の繪に限らず日本人の手に成ッた物なら油畫でも總稱して日本畫と言ひます）の永久の運命を美事につなげる事が出來ましやうか。

思ふに現れた處の光彩はその心の影。奈良の美術は奈良の心が有ッて出來たので、時代をかへて之が出來るなら、よし何うにしろ、其物は僞造品です。　常に支那風を戀ひしたッても和人の書蹟は純粹の和人の書蹟でした。　もしも國風、すなはち國の固有がみだりに五六十年の摸擬で移せる物ならいざ知らず、國風の移せぬのは既に然るべき人の認めた處、果たして外人が日本畫を學んで純粹の日本畫を作り得、また和人が洋畫を學んで充分の洋畫を作り得るものならまだ兎も角。決してそれは出來ぬといふ事が確な事實であッた事なら吾々は諸氏が洋畫を學んで無盡に洋畫の意匠を其儘用ゐられるのに服せません。　今一々拾ひ上げぬとしても、世間具眼の士の中には馬見所にある畫の意匠と同じ物が有名の西洋の繪の中に有ッたとれ心付いた事でしやう。　意匠を取る、素より宜しいです。　意匠を加へずに人の意匠を取るのは尤も卑劣の極度です。　奪胎は宜しいです。剽窃は疎ましい事です。　上野馬見所にあッた繪の中で剽窃したのが有ッたか何うかは――もし剽窃した人が有るなら――その人の赤心に問ふだけで宜しい事ですが、兎に角吾々は重ね〲今度の油畫に日本風の意匠が乏しいといふ事を斷言するに於ては、たとひ諸氏の中に剽窃した者のあッたにしろ又無かッたにしろ、更に外人の進歩の實一層わが國の諸氏より敏捷なのを見て坐に悲しまなければなりません。

ほいすらア氏の橋上夜景の圖は日本の兩國橋花火の圖から意匠を取ッて更に自國の意匠を加へて天晴れ自國の一個の繪を作りました。（かアす　おう　こしゆう）の表紙は日本畫から意匠を奪ッて別に意匠をも加へずそのまゝ一面の畫に作りました。　繪を見れば優劣は直にわかる事。よし見ずとも優劣はあらかじめ占はれる事です。

西の美術と東の美術と入りみだれて影響の度に於て東西その力を角べて居るのが今日の勢ですが、しかし外國の外人が（內國の外人では無く）外國美術の趣味を移す事に盡力して

居る度は今の處はるかに内國の内人が外國美術の長處を學ぶ度に過ぎて居ます。之に加ふるに間接に美術に大影響を持つ社會の程度が彼是相違して而もそれも吾が彼に劣る處を見れば、當局の美術家は更に二倍の勉勵をされるべき譯です。吾々は日本美術の美を知らぬとも信せぬながら猶日本美術を進歩させるには今後西洋美術の長處をも大に我國風に入れたく考へる所存で、即ちそのためには今日の油畫諸工諸氏に二つと無い望みを屬します。今迄の酷評もそのためです。御參考の端ともなる事ならば幸です。（をはり）

美妙齋主人の新著長歌

一部物語りの長歌（即ちエピック　ポエム）を近々に發兌する計畫が美妙齋主人にあッて、世に公になるのは今年を超えぬその事です。　主意は一人の男子が想像の美人に戀着して居たところ其美人が病死したといふ處に起り、それから毎夜その墓を尋ねて夜を明かして居る内、とある道端の姫墻の中に似たやうな美人をまた二人（一人は容貌の美麗なもの、一人は心の美しいもの）見出だし、かれ是思ひ迷つて居たその末、終に大に悟るところが有ッたといふのが全篇の趣意で之に添へて主人が抱かれる、將來の日本長歌についての論文をも出されるとの事です。今その長歌の中から一節を拔いて諸嬢の御覽に入れましやう。

わが　やどは　なげきの　森　か。
　くるしみを　われは　餌に　食む。
たのしみに　つちかはせ　つゝ
　うき　みのみ　たゞ　繁り＝行く。
きり＝すてん「無情」の　やいば
　冷に　てる　ひかり　貸せ。
借りながら　身の　うらめしき、
　かざせども　思ひ＝たゝれず。
われに　こぶる　森羅萬象、
　煩惱の　かげ　ならぬは　無し。
ことわざに　まことの　花は
　わが　いろの　よきを　知らずと。
おもひきや　まよひぬる　身と
　さとる　身の　なほ　迷ふとは。
かへる　雁、　夜は　いと　しづか、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY